

佐藤征弥¹: イチョウの歌が聴こえる ～堀 輝三先生を偲んで～Masaya Satoh¹: Terumitsu Hori, a historian who studied the introduction of *Ginkgo biloba* into Japan

さる2月24日、堀輝三先生が亡くなられた。67歳であった。堀先生は下等植物の進化において数々の業績を残されていたが、晩年にはイチョウの歴史を紐解く作業に精力を注いでおられ、本学会にもその目的で参加されていた。堀先生の業績のすべてを記そうとすればとても紙面が足りないので、ここではイチョウに魅入られた人物の途方もない夢と行動について紹介したいと思う。研究対象に愛着を持ち、没入できることは研究者にとって幸いなことであり、堀先生とイチョウがまさしくその関係であった。そうなった時に人は何事を成し遂げることができるかを示す例であると思う。

研究者というものはどこかマニアックな面を持つものだが、堀先生の仕事の徹底ぶりは特筆すべきものであった。アイデアの壮大さとそれを実行する行動力と忍耐力があり、かつ1つ1つの問題に対しては微に入り細を穿つようにして決して手を抜かない態度は、周りの人々から畏敬され、時にはあきれさせるほどであった。特に日本全国のイチョウの巨樹を調べて書かれた晩年の2冊の著書『日本の巨木イチョウ』と『総覧・日本の巨樹イチョウ』は特にそれが

表れている堀先生でなければ作ることのできなかつた本であると思う。その仕事ぶりを紹介する前に、まず堀先生の経歴とイチョウを愛するようになった経緯を簡単に記しておこう。

堀先生は1938年北海道に生まれ、東京教育大学で理学博士を取得された後、東邦大学、次いで筑波大学で教壇に立たれた。その間、日本藻類学会の会長、様々な学会の役職や学会誌の編集委員を務められた。研究の出発点は、藻類のべん毛装置構造の解析であり、それを藻類の分類や生殖様式の進化研究に応用され、この分野の研究の世界的なリーダーであった。次第に研究対象が陸上植物へと拡がり、イチョウやソテツといった裸子植物の受精の研究へと展開していった。イチョウやソテツが遊走性の精子で受精を行うことは今から100年以上前に日本の研究者が発見したことで有名であるが、堀先生は先人の偉業を引き継いで、現代に蘇らせることを決心され、イチョウやソテツの精子が形成され、泳ぎまわり、卵細胞に引き寄せられていく過程を世界で初めてビデオで撮影することに成功された（これは2000年に東京シネマ新社から『種子の中の海』という



写真. 埼玉県東松山市正法寺のイチョウの調査を行う堀先生.

タイトルで発売され、第41回科学技術映像祭科学技術庁長官賞をはじめ国内外の数々の賞に輝いている)。受精の研究の対象として選んだイチヨウではあったが、徐々にイチヨウの歴史へと興味が広がっていった。イチヨウは、今日ではポピュラーな樹ではあるものの、実は日本に伝来してから600～700年位しかたっておらず、伝来の時期や場所も明らかになっていないことを知って、ぜひともこれを明らかにしようと決心された。また、最初は趣味で巨樹イチヨウを訪ねていたものが、数多くの巨樹を訪ね歩くうちにそれぞれの樹にも愛着がわき、1本1本の樹についてその歴史を調べることも始められた。

2002年に筑波大学を退官されると、雑用で時間をとられることなくイチヨウの研究に没頭したいとの思いから、就職先を一切断わって、まさしくイチヨウ三昧の生活を送られた。ご自宅を「銀杏科学研究舎」と名付けられて、堀先生が主宰(主任研究員)、奥様が研究員となられた。こじんまりとした研究舎だが、活動は精力的であった。2003年には『日本の巨木イチヨウ』を、2005年には『総覧・日本の巨樹イチヨウ』を内田老鶴圃から刊行された。前者は幹周囲が6～7mのイチヨウについて、後者は幹周囲が7m以上のイチヨウの写真集・資料集である。両方合わせて約500本の樹を網羅した労作である。本にはすべての樹について2回は訪問したと書かれているが、2回どころではなく何回も訪ねた樹がほとんどだと思う。有名な巨樹を見ておこうという興味で始まったイチヨウ巡りであったようだが、環境庁(当時)発行の巨樹リストや様々な資料を参考に訪ねているうちに、記載の誤りやリストから漏れている樹があることに気づいて、より正確な記録を残そうと思立たれた。当初は葉の繁った時期に訪ねていたが、樹形や枝ぶりを見るために葉を落とした時期が良いことが分かってから、晩秋や冬の時期にも調査に行かれていた。最低2回は訪問したというのは、葉のある時期とない時期の写真撮影するためなのである。また、イチヨウの伝来・伝播を明らかにする目的でDNAの分析を行うことを思いつかれ(その分析を私が依頼され、全国の巨樹イチヨウのDNAタイプを調べている)、DNA抽出の試料とするために葉を採取するという目的ができたり、生物学的興味以外に個々の樹の歴史についても調べて記録に残しておきたいという興味も湧いてきて、樹の旁にある石碑や看板なども調査項目になったりして、データの足りない樹がある場合は、それを補うために何度も訪問されていた。近い所にある樹ならいざ知らず、全国に散らばる500本もの樹を何度も訪ねるのは、普通の感覚からしたら面倒くさくて嫌気がさすところだが、堀先生はまるでそういうところがなかった。むしろ、新たな目的が見つかる、「またあの樹に会いに行ける」と喜んでおられた。イチヨウを訪ねる旅行は、

大抵の場合、車を使つての移動となるのだが、小柄な体のどこにそんな元気が、と思わせるほどのタフネスを発揮され、猪突猛進という感じで、休む間もなく次から次へと車を走らせて樹を訪ねまわられていた。堀先生から私宛てに頂いたe-mailからそれがどのようなものだったか紹介しよう。

<2003年7月7日>

急ですが、明日8日から12日(土)まで、青森県、岩手県、秋田県を集中的に、これまで採集していない樹の葉の採集に行きます。

旅程は、8日の泊まりは、二戸市

9日の泊まりは、八戸市

10日の泊まりは、十和田市

11日の泊まりは、秋田市

の4泊5日で出かけます。少なくとも45本の巨樹、巨木イチヨウの葉を集めてきます。帰ったら、直ぐ送ります。

<2003年7月13日>

今漸く、採集サンプルの整理がつき、くろねこ宅急便で送り出しました。50サンプル(49本分)あります。未だ生きていて、呼吸しているので、各袋の封はしなかったもので、外装の袋を開けるときは、中味が飛び出して、互いに混じることのないように、気をつけてください。今回で、青森県、岩手県、秋田県の3県については、青森県の浪岡町の1本を除いて、全部網羅したと思います。浪岡については、後日、送れるでしょう。

この7、8月には、残る福島、山形を含めて、関東地方を網羅的に採集しますので、関東地方各県の既採集木と未採集木のリストを、北陸も含めて、送って下さい。

久し振りの2500キロの長距離ドライブには疲れしました。しかし、予定以上の本数の採集が無事完遂できたことに満足しています。

<2003年8月6日>

今朝、福島県8本、宮城県1本の試料を郵送しました。

昨日は、一般道を使つての600kmだったので、さすがに疲れしました。

でもこれで、東北6県については、1～2本を残すだけで、ほぼ主なものは網羅できたかと思えます。残るは埼玉、東京です。

また、堀先生が四国に来られた時には、私が車を運転して一緒にイチヨウ巡りをしていたのだが、その時のエピソード

ドを記しておこう。高知に行った時のことだが、昼飯時になって食事をどうしますかと聞いたら堀先生の答えはコンビニで何か買って済まそうというものだった。当然どこかの店に入って昼食を取るものと思っていたので、少々落胆したが、やむなくコンビニに入ってパンやおにぎりを買って、駐車場で食べることにした。しかし車の中での食事中、堀先生の様子は何やら不満げであった。口には出されなかったものの、「食べながら運転できないの？」とその表情は訴えているようであった。後日、奥様にその話をすると、実際に自分ではほとんどいつもそうしているとのことで、片手で食物を、もう一方の手でハンドルを握って、食事しながら運転をするのが当たり前のことだったのだ(!)。さすがに、私に向って同じことをしなさいと言われることはなかったが、私が感じたプレッシャーは正解だったのである。ちなみに奥様によれば、一緒に調査にでかける際には、各地の名所や名物料理にはまったく興味がない堀先生を説き伏せて、寄り道させるのに苦労させられたそうである。しかし、堀先生の名誉のために付け加えておくと、美しい風景を見ながら奥様と一緒にイチョウを訪ねて車を走らせるのは至福の時間だったそうである。

また、一緒に調査に出かけた時に次のような出来事もあった。夕方、訪ねた巨樹イチョウの写真を撮っている時に、ドルザークの「家路」という曲が付近の道路に据え付けられたスピーカーから聞こえてきた。その場所では大がかりな道路工事をしている、夕方の5時になったので、作業

員が仕事を終える合図のために、その曲を流していたのだ。堀先生は曲が流れている間ずっと樹に向かってカメラを構えていたのだが、しばらくして顔を上げて「樹の中から音楽が聞こえてきたかと思った」と真顔で言われた。荒唐無稽ではあるが、堀先生には、それが不自然ではなく感じられたのだろう。樹の奏でる音楽をどのような思いで聴かれていたのだろうか。

著書『日本の巨木イチョウ』には「23世紀へのメッセージ」という副題が付いている。ここに堀先生のイチョウに対する様々な思いが凝集していると思う。21世紀でも22世紀でもなく、23世紀の人々に向けて語りかけているのである。これが単に言葉だけでないことは、本書には、個々の樹について、過去と現在のデータが表に記載されているのだが、その表に空欄が設けてあって、2100年代と2200年代のデータを書き込めるようになっているのである(!)。ここ数年は、特に過去と未来を繋ぐということをとっても意識されて仕事をされていたと思う。果たして23世紀の人たちにまで、樹を守り、樹の歴史を掘り起こし、樹への親しみや尊崇を持ち続けていることができるか、胸を張って堀先生のメッセージを届けることができるか、自分を含めて現代に生きる人々に残された課題であると心にかみしめている。

(¹ 〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部
Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of
Tokushima, Minami-josanjima Tokushima 770-8502, Japan)